

たま※ [# 「ころもへん+攀」、U+897B]

一葉女史

青空文庫

上の一

をかしかるべき世を空蟬のと捨て物にして今歳十九年、天のな
 せる麗質、をしや埋木の春またぬ身に、青柳いと子と名の
 み聞ても姿しのぼる、優しの人品、それも其筈昔しをくれば
 系圖の巻のこと長けれど、徳川の流れ末つかた波まだ立たぬ江
 戸時代に、御用お側お取次と長銘うつて、席を八萬騎の上
 坐に占めし青柳右京が三世の孫、流轉の世に生れ合はせて
 は、姫と呼ばれしことも無けれど、面影みゆる長襦袢の縫も
 よう、母が形見か地赤の色の、褪色て残るも哀いたまし、住む所
 は何方、むかし思へば忍が岡の名も悲しき上野の背面谷中のさと

に形かたばかりの枝折門しをりもん、春はるは立たちどまりて御覽ごらんぜよ、片枝かたえさし出だす
 垣かきごしの紅梅こうばいの色いろゆかしと延のびあがれど、見みゆるは萱かやぶきの軒の
 端きはばかり、四邊あたりは廻めぐらす花はな園そのに秋あきは鳴なかん虫むしのいろく、天て
 然んねんの籠ろうちう中おさに收おさめて月つきに聞きく夜よの心こころきゝたし、扱さてもみの虫むしの父ちち
 はと問とへば、月つき毎ごとの十二日ちに供そなゆる茶湯ちやとうの主ぬしが夫それ、母はも同じ
 く佛ぶつ檀だんの上うへにとかや、孤獨こどくの身みは霜しもよけの無なき花くわだん檀きくの菊きくか、
 添そへ竹だけの後うしろ見みともいふべきは、大だい名みやうの家かろうし老職しよく背負せおてたち
 し用よう人にんの、何なに之の進しんが形見かたみの息松せがね野雪つ三せつとて歳とし三十五六と、親おや
 ゆづりの忠魂ちうこんみがきそへて、二代だいの奉仕ほうしたゆみなく、一町ちやあま餘まり
 なる我わが家いへより、雪ゆきにも雨あめにも朝てう夕せき二度どの機嫌きげんきゝ怠おこたらぬ心殊こころ殊じゆ
 勝しやうなり、妻つまもたずやと進すすむる人ひとあれど、何なんの我わがこと措おき給たま

へ夫それよりは嬢ぢやうさまの上うへ氣きづかはし、甘は歳たちといふも今いまの間まなるを、
 盛さかりすぎては花はなも甲か斐ひなし、適てき當たうの智む君こぎみおむかへ申し度たきもの
 と、一い意せん專しん心しん主しうおもふ外ほかなにも無なし、主しゆ人じん大だい事じの心こころに比くらべ
 て世せ上じやうの人ひとの浮ふ薄はく浮ふ佻てう、才さいあるは多おほし能のうあるも少すくなからず、容よ
 姿う學しがく藝げいすぐれたればとて、大だい事じの御ご一しやう生たくを托たすに足ひとる人み見わた渡し
 たる世せ上じやうに有ありや無なしや知しれたものならず、幸かう福ふくの生しやう涯がい
 を送おくり給たまふ道みち、そも何なにとせば宜よからんかと、案あんじにくれては寐ねず
 に明あかす夜よ半はもあり、嫁よめ入い時ときの娘むすめもちし母は親おやの心こころなんのものか
 は、疵きずあらせじとの心しん配はい大おほ方かたにはあらざりけり、雪せつ三ぎやうかく
 まで熱ねつ心しんの智む撰ゑんみも、糸いと子こは目めの前まへすぐる雲くもとも思おもはず、良を
 人つとも持もたんの觀くわ念ねん、何なにとして夢ゆめさらくあらんともせず、樂たのみ

は春秋はるあきの園生そのふの花はな、ならば胡蝶こてふになりて遊あそびたしと、取とりとめも

なきこと言いひて暮くらしぬ、さるほどに今歳ことしも空むなしく春はるくれて衣ころもほす

てふ白妙しろたへの色いろに咲垣根さくかきねの卵うの花はな、こゝにも一の玉川たまがはがと、遣や

りみづながの流ほそれ細とき所ところに影かげをうつして、風ぜかなくとも涼すゞしき夏なつの夕暮ゆふぐれ、

いと子湯こゆあがりの散そゞろあるき歩うちみづに、打水うちみづのあと輕かろく庭下駄にはげたにふんで、

裳もすそとる片手かたてはすかし骨ほねの塗柄ぬりえの團扇うちわに蚊かを拂はらひつ、流ながれに臨のぞんで

立たつたる姿すがたに、空そらの月つき恥はぢらひてか不圖ふとかゝる行ゆくく雲くもの末すゑあたり俄にわかに

暗くらくなる折をりしも、誰たれが思がもひにか比ひす螢ほたる一風かぜにたゞよひて只眼ただめの前まへ、

いと子こ及およぶまじと知しりても只ただは有あられず、ツト團扇うちわを高たかくあぐれ

ばアナヤ螢ほたるは空そら遠とほく飛とんで手元てもといかゞ緩ゆるるびけん、團扇うちわは卵うの

花垣はな越こえて落おちぬ、是こは何なにとせんと困かうじ果はて、垣根かきねの際ひまよりさ

しのぞけば、今しも雲足きれて新たに照らし出す月の光りに、
 めめみあは目と目見合して立たる人、何時の間に此所へは來て、今まで隠れ
 てゞも居しものか、知らぬことゝて取乱せし姿見られしか、見
 られしに相違なしと、面俄にあつくなりて、夢現うつむけば、
 ほそきよをとここゑ細く清しき男の聲に、これは其方さまのにや返上せんお受
 取なされよと、垣ごしにさし出す我が團扇、取んと見あぐれば
 はづびせうねん恥かし、美少年、引かんとする團扇の先一寸と押へて、思ひに
 もゆるは螢ばかりと思し召すかと怪しの一言、暫時は糸子われ
 かと人か、有無の間に迷ひし心、本の心に歸りし時は、卯の花垣
 に照る月高く澄んで、流れにうつる影我一人になりぬ、さるにて
 も彼の人は誰ならん、隣家は植木屋と聞たるが、思ひの外の人

品らかなと、其方そなたを眺ながめて佇た立ずめば、風かぜに傳つたはる朗詠らうえいの聲こゑい
とゞ床ゆかしさの數かずを添そへぬ糸子世いとこよは果敢はかなきものと思おもひ捨すて、盛さか
りの身みに紅白粉べにおしろいよそほはず、金釵綾羅きんさりようらなんの爲ための飾かざり、入いら
ぬことぞと顧かへりみもせず、過すぎし心こゝろに恥はづかしや、我われ迷まよひたりお姿すがた
今いま一度見みまほし、と延のび上あがれば、モシと扣ひかへらる、袂たもとの先さき、誰た
れぞ才まつの、松野なんか何なんとして此所こゝへは否いや何時いつの間まにと詞有ことば哉無やむ哉支やし
離滅裂りめつれつ

上乃二

丸窓まるまどにうつる松まつのかけ、幾夜詠いくよながめて月つきも闇やみになるまゝにいと子こ
の心こゝろその通とほり、打うちあけては問とひもならぬ、隣となりの人の素性すじやうき聞きたし
と思おもふほど、意地いちぢわろく誰たれも告つげぬのか夫それとも知らぬのか、

よもや植木屋の息子にてはあるまじく、さりとして誰れ住替りし
 うはさき風説も聞かねば外に人の有る筈なし、不審さよの底の心ろは其
 のひとゆか
 人床しければなり、用もなき庭歩行にありし垣根の際、幾度
 びか顧りみて思へば、さてもはした無きことなり、氏も知らず素
 じやう性も知らず、心情も何も知れぬ人に戀ふとは、我れながら
 あさ浅ましきことなり、定なき世に定めなき人を頼む、婦人の身はか
 なしと思もひ絶て、松野が忠節の心より、我大事と思もふあま
 りに様々の苦勞心痛、大方ならぬ志は知るものから、夫
 すら空ふく風と聞きて、耳にだに止めんとせざりし身が、何ぞや
 あと跡もかたも無き戀に磯の鮑の只一人もの思ふとは、心の問はんも
 うら恥かし、人知らぬ心の惱みに、昨日一昨日は雪三が訪問

さへ嫌忌うづるさくて、詞多ことばほくも交かはさゞりしを、如何いかに聞きて如何いかばかり
 案あんじやしけん、氣きの毒どくのこととしてけるよ、いで今日けふの日ひも暮くれなん
 とするを、例れいの足あしおとする頃ころなり、日頃ひごろくもりし胸むねの鏡かゞみすゞしき
 物もの語がたりに晴はらさばやとばかり、垣根かきねの近邊ほとりたちはなれて、見返みかへり
 もせす二三歩ほすゝめば遣水やみづの流ながれおと清きよし、心こゝろに定さだまつ
 て思おもへば昨日きのふの我われ、彷彿ほうふつとして何故なにゆゑに物ものおもひつる身みぞ、
 廣ひろき園生そのふは我わが爲ために四季しきの色いろをたゝかはし、雅みやびやかなる居間あまは
 我わが爲ために起居きよの自由じゆうあり、風かぜに鳴なる軒のきばの風鈴ふうりん、露つゆのしたゝ
 る釣つり忍しの艸のぶ、いづれをかしからぬも無なきを、何なにをくるしんでか、
 要えうなき胸むねは痛いためけん、愚おろかしさよと一人ひとり笑わらみして、竹椽ちくえんのはし
 に足あしを休やすめぬ、晚風ばんふう涼すずしく袂たもとに通かよひて、空そらに飛とびかふ蝙蝠かはほりのか

げ二つ三つ、夫それすら漸やうやく見みえず成なりゆく、片折戸かたをりどを靜しづかに音おとなふ
 は聞きなれし聲音こはねなり、いと子厨こくりやのかたに聲こゑをかけて、玉たまよ雪せつ二三せつぎう
 が參まゐりたりと覺おぼゆるに、燈火ともしびとくと命いひつけ令ひつけながら、ツト立たちて門かどの
 方かたうち見みやりしが、闇やみにもしるき白しろき手を舉あげて、稚おさなご兒ごが母はよ
 ぶ様やうに差さまねぎつ、坐敷ざしきにも入いらではるかに待まてば、松野まつのは徐おもか
 に歩あゆみを進すすめて、早はやく竹椽ちくえんのもとに一いつしふ揖いするを、糸子いとこかるく
 受うけて莞爾にこやかに、花はな蕙むしろの半なかを分わかけつ、團扇うちわを取とつて風かぜを送おくれ
 ば、恐おそれ多おほしと突つて手懸ていんぎん懃んなり、此このほどはふくわい不快うけたまはと承まりしが、
 最も早はや平日へいじつに返かへらせ給たまひしか、お年としご輩らには氣鬱きうつの病やまひの出でるも
 のと聞きく、例れいの讀どく書しよは甚はなだわろし、大だい事じの御身おんみなほ等ざり閑いにおぼし
 めすなど、知しらねばこそあれ眞實まめやかなる詞ことばにうら耻はづかしく、面おもてす

こし打ち赤めて、否とよ病氣は最う癒りたり、心配かけしが
 氣の毒ぞと我れ知らず出る侘の言葉に、何ごとの仰せぞ、主
 從の間に氣の毒などの御懸念ある筈なし、お前さまのおん身
 に御病氣その外何事ありても、夫はみな小生が罪なり、御
 兩親さまのお位牌さては小生が亡兩親に對して雪三何の申
 譯なければ、假令身にかへ命にかへても盡くし參らする心なる
 を、よしなき御遠慮はお置き下されたしと恨み顔なり、これ程
 までに思ひくるゝ、其心知らぬにも有らぬを、この頃の不
 愛想我が心の悶ゆるまゝに、詞交はずが懶くて、病氣など、
 有もせぬ偽りは何ゆるゑに云ひけん、空おそろしさに身も打ふるへ
 て、腹たちしならば雪三ゆるしてよ、隔つる心は微塵もなけれ

ど、主の家來の昔しは兎もあれ、世話にこそなれ恩もなにもなき
 我が身が、常日ごろ種々の苦勞をかける上にこの間中よ
 りの病氣、それ程のことでも無かりしを、何故か氣が鬱ぎて、
 心にも無き所置ありしかもしれず、夫がつひ氣の毒にて言ひたる
 なれど、心に障はらば二度とは言はじ、汝に捨られて我れ何とし
 てか世には立つべき、心おさなければ目にあまることも有らん、
 腹立しきことも多ならんが、外に寄る邊のなき身なるを、妹と
 も娘とも斷念めて、教へ立られなば嬉しきぞと、松野が膝ゆり動
 かして涙ぐめば、雪三身を退りて頭を下げつゝ、分にあまりし
 仰せお答への言葉もなし、お心細き御身なればこそ、小生風
 情に御叮嚀のお頼み、お前さま御存じはあるまじけれど、徃

昔みの御身ごみぶん分ぶんおもひ出だされてお痛いたはし、我われ後うしろみ見みまゐらす
 程ほどの器きり量りやうなけれど、赤まごころ心こころばかりは誰たれ人びとにまれ劣おとることかは、
 御おこころ心こころやすく思おぼしめ召よせよ世よにも勝すぐれし賀むこぎみむか君ま迎まへ參まらせて花はな
 々／＼しきおん身みにも今いまなり給たまはん、嗚呼をこがましけれど雪せつぎやう三さんが生しや
 涯うがいの企望のぞみはお前まへさま御ご一しん身の御ごかうふく幸福ふくばかりと、言いひさして
 詞ことばを切りつ糸いと子が面おもてじつと眺ながめぬ、糸いと子こ何なに心こころなく見返みかへして、
 我われは花はな々／＼しき身みにならんねがの願ねがひもなく、まして賀むこむかへんの
 嫁よめい入りせんよのと、世よの人ひとめかしき望のぞみ少すこしもなし、只ただ汝なさへ見捨みすて
 ずは、御身おんみさへ厭いとはせ給たまはずは、我わが生しやう涯がいの幸かう福ふくぞかしと
 て嬌然にっことばかりうち笑あめば、松野まつのじりくひぎと膝ひざを進すすめて、嬢ぢやうさま
 は夫それほどまでに雪せつぎやう三さんを力ちからと覺おぼしめしてか、それとも一時じのお戯たはむ

れか、御本心仰せ聞けられたしと問ひ詰むるを、糸子ホ、と笑
 ひて松野が膝に軽く手を置きつ、戯むれかとは問ふ丈も浅し、親
 とも兄ともなく大切に思ふものをと、無心に言へば忝なしと一
 言語尾ふるへて消えぬ

(中の一)

洗ひ髪あらがみの束髪そくはつに薔薇ばらの花はなの飾かぎりもなき湯上ゆあがりの單衣ゆかたでたち、素
 顔がほうつくしき夏なつの富士ふじの額ひたひつき眼めに残のこりて、世よは荻をぎの葉はに秋風あきかぜ
 ふけど螢ほたるを招まねきし塗柄ぬりゑの團扇うちあ、面影おもかげはなれぬ貴公子きこうしあり、駿す
 河臺がだいの紅梅こうばい町ちやうにその名なも薫かほる明治めいぢの功臣こうしん、竹村たけむら子し
 爵くとの尊稱そんしょうは千軍万馬せんぐんまんばのうちふくに含ふくみし、つばみの花はなの開ひら
 けるにや、夫それが次男じなんに縁みどりとて才識さいしき並ならび備そなはる美少年びせうねん、今歳ことし

のなつの避暑へきしよには伊香保いかほに行かんか磯部いそべにせんか、知る人ひとおほ
 からは佗わびしかるべし、牛うしながら引入ひきいれる中川なかがはのやどり手てぢか近く
 して心こころやす安とこころき所ところなからずやと、打うちうめかれしを出入でいりの橐駝たくだし師
 某それなるもの承うけたまはりて、拙郎やつがれが谷中やなかの茅屋ぼうおくせき入れし水みづの風流みやび
 やかなるは無なきものから、紅塵こうじん千丈せんぢやうの市中まちなかならねば涼すゞしき
 かげもすこしはあり、足あしを運び給たまはゞ忍しのぶが岡おかの緑りよくしゆ樹あきの朝あさつ
 ゆ、寢間着ねまきのまゝにも踏ふみ給たまふべし、螢ほたるめいしよ名所なばたの田畑ちかも近ちかかり、
 只天王寺たゞてんわうじの近ちかき爲ために、蚊かはあまり少すくなからねど、吹ふき拂はらふに足た
 る風かげじふん十分じふぶんなり、兔とに角思かくおもひ立たたせ給たまへとて、紀きの守かみが迷めい惑わく氣げ
 にも見みえず誘いざなふにぞ、夫それよ好よからんとて夏なつのさし入いりより、別はなれざ
 室しきを仮住かりずみに三月みつぎばかりの日ひを消けしゝが、歸邸きていの今日けふの今いまも猶なほ

残る記臆のもの二ツ、隣家に咲ける遅咲きの卯の花、都めづらしき垣根の雪の、涼しげなりしを思ひ出ると共に、月に見合はせし花の眉はぢて背けしえり足の美しくさ、返す團扇に思ひを寄せし時憎くからず打笑みし口元なんど、只眼の先に沸き來たりて、我れ知らず沈思瞑目することもあり、さるにても何人の住家なびと すまゐにや、人品の高尙かりしは、無下に賤しき種には有るまじ、妻つまか娘か夫すらも聞き知らざりし口惜しさよ、宿の主は隣家のことやどあるじ となりなり、問はば素性も知るべきものと、空しくはなど過しけん、むすめ それ きさりとして今更問はんもうしろめたかるべしなんど、迷ひには智ち惠の鏡も曇りはてゝや、五里の夢中に彷徨しが、流石に定むるゑかゞみくも さすが さだ所ありけん、慈愛二となき母君に、一日しか／＼と打明けらじあひ はゞきみ あるひ うちあ

れぬ、さはいへど人妻ならば及ぶまじことなり確めて後斷念せ
ひとづま およ たしか のたんねん
 んのみ、浮たる戀に心ろを盡くす輕忽しさよとも覺さんなれど、
うき こひ こゝ あわつけ おぼ
 父祖傳來の舊交ありとて、其人の心みゆる物ならず、家格に
ふそでんらい きうかう そのひと こゝろ もの かかく
 隨ひ門地を尊び、撰りに撰りて取る虫喰栗も世には多かり、藻
したがもんち たつと え え と むしくひぐり よ おほ も
 ぐずに埋もるゝ美玉又なからずや、哀この願ひ許容ありて、
うづ びぎよくまた あわれ ねが きよよう
 彼女が素性問ひ定め給はりたし、曲りし刀尺に直なる物はかり
かれ すじやうと さだ たま まが さし すぐ もの
 難く、惑ひし眼に邪正は分け難し、鑑定は一重に御眼鏡に
がた まよ めめ じやしやう がた かんてい ひとへ おめがね
 任さんのみと、恥たる色もなく陳べらるゝに、母君一卜度は惘
まか はじ いろ の ちか ねんしん きは はくぎみ たび あき なにご
 れもしつ驚ろきもせしものゝ、斯くまで熱心の極まりには、何
とひ いで し まか うちあ しゆしやう
 事引き出られんも知るべからず、打明けられしだけ殊勝な
よろつは、 むね まか こゆゑ やみ ゆふぐれ
 り、萬は母が胸にあり任せたまへと子故の闇に、ある夕暮の墓
ぼ

参さんの戻もどり、橐うゑ繩き師やがり許りくるまを寄よせて、入いりもせぬ鉢はちもの、買かひ上げ、
 扱さてて、ゑんない、園い内ていの手てい入いれを賞ほめなどして、
 遣ぞう 遙あるきの端はしに若もし其人そのひと
 見みゆるやと、垣かき根ねの隣となりさしのぞけど、園その生み廣ひろくして家い遠とほく、萱かやぶ
 きのきの軒なかば半おほば掩たいふ大じゆ樹まつの松したの滴ごたる如ごとき緑みどりの色いろの目めに立たちて見みゆ
 るばか、聲こゑきくよすがも有あらざりければ、別はな亭なれに濫しぶ茶ちやすゝりな
 がら夫それとなき物ものがたり語ご、この四あ隣たりはいづれも閑かん静せいにて、手て廣びろき
 園その生ふ浦うら山やましきものなり、此この隣となりは誰たれ様さまの御ご別べつ莊さうぞ、松まつば
 かりにても見み惚とるゝやうなりとほゝ笑ゑめば、否いや別べつ莊さうにはあら
 ず本ほん宅たくにておはすなりと答こたふ、是これを話はなしの糸いと口ぐちとして、見み惚と
 れ給たまふは松まつばかりならず、美うくしき御ご主しゆ人じん公こうなりといふ、然され
 ばよなと思おもひながら、殊こと更さらに知しらず顔がほ粧そほひつゝ、主ある人は御ご婦ふ人じん

なるにや、さて扱なは何某殿びぼうじんの未亡人とか、さらずは妾おもひものなんどいふ
ひと人か、別べつして與あたへられたる邸宅ていたくかと問とへば、否いや然しからず舊むかしを
 いはば三千石ごくの末流まつりうなりといふ、さらば旗下はたもとの娘御むすめごにや、
おやご親御おやごなどもおはさぬか、一人住ひとりずみとは痛いたはしきことなりと、早はやく
そのも其ひとの人不憫ひとふびんになりぬ、此處こゝの主も多はなし辨ずきにや咳しわぶ勿ぎつ躰つたいらしく
 して長なが々と物語ものがたり出いでぬ、祖父そふなりし人ひとが將軍家しやうぐんけの覺おぼえ淺あさから
 ざりしこと、今いま一足あしにて諸侯しよかうの列れつにも加くわへ給たまふべかりしを不幸ふかう
たんめい短命たんめいにして病びやう没ぼつせしとか、或あるひは其頃そのころの威勢めをひは素晴すばらしきも
 のにて、いまの華族くわぞく何なんとして足下あしもとへも依よらるゝ物ものでなしと、
くちべ口津くちべらして遽あわたしく唇くちびるかむをかし、夫それに比くらべて今いまの活計くわしは、火ひの
きえ消きえしも同おなじことなり、彼あれほどの地邸ぢやしきに公債こうさいも何なにほどかは持もち

たまふならんが、夫も嬢さまが身じんまく丈漸々なるべしと、
 われ入り立ツて見し様な話しなり、老爺は何として其やうに委し
 く知るぞと問へば、否や拙郎は皆目知るはずなけれど、一昨
 年病亡りし嬢さまの乳母が、常日頃遊びに來ての話なりといふ
 お歳は十九なれどまだまだ十六七としか見えぬ、夫から思へば松
 野どのは大層に老けられたりと我一人呑込顔、その松野殿
 とかは娘御の何ぞと問はれて、成るほどなるほど御存じは無き
 筈なりとて、更に松野の爲に願しばらく働かせぬ、さればこそ暮
 やすき、秋日の短時間に、糸子主従は竹村夫人が胸
 中の知己とぞなれりける

(中の二)

ころもへんくわ
 心は變化するものなり、雪三が往昔の心裏を覗はゞ、糸子
 に對する觀念の潔白なること、其名に呼ぶ雪はものかは、
 主人大事の一ト筋道、振むくかたも無かりし物の、寄る邊な
 き御身憐れやとの情やうく長じては、我れ一人をば天が下の頼
 もし人にして、一にも松野二にも松野と、隔だてなく遠慮なく
 甘へもしつ※強もしつ、睦れよる心愛らしさよと思ひしが、そも
 く流れに塵一ツ浮びそめし初めにて、此心更に追へども去
 らず、澄まさんと思ふほど搔きにごりて、眞如の月の影は何處
 朦々 朧々 の淵ふかく沈みて、目に遮ぎるは月を追ひ日に
 随ひて艶いよく艶ならんとする雨後春山の花の顔、妍ますノ
 妍ならんとする三五夜中の月の眉いと子が容姿ばかりなり、かゝ

りけれども猶ほ一片誠忠の心は雲ともならず霞とも消えず、流
 すがかへ石に顧りみるその折々は、慚愧の汗背に流れて後悔の念胸
 を刺つゝ、是は魔神にや見入れられけん、有るまじき心なり、我
 れに邪心なきものと思せばこそ、幼稚の君を托し給て、心やす
 く瞑目し給ひけれ、亡主に何の面目あらん、位牌の手前も
 さることなり、いでや一對の智君撰み參らせて、今世の主君
 にも未來の主君にも、忠節のほど顯はしたし、然かはあれど氣
 遣はしきは言葉たくみに誠少くなきが今の世の常と聞く、誰人
 か至信に誠實に、我が愛敬する主君の半身となりて、生
 涯の保護者とはなるべきにや、思へばいとも覺束なきことな
 り、我れに主從の關係なくば、我れ松野雪三ならずは、青

おやぎ
 柳いと子嬢の手を取りて、
 下したに又またとはあるまじ、さりながら是こは叶かなふべきことならず、仮かり
 にもかゝる心こころを持たんは、愛あいするならずして害がいするなり、いで今いま
 よりは虚きよしん心平氣へいきの昔むかしに返りて何なにごとをも思おもふまじと、斷念だんねんい
 さましく胸むねすゞしくなるは、青柳家あをやぎけの門踏かどふまぬ時ときなり、糸子いとこが
 愛あいらしき笑顔ゑがほに喜よろこび迎むかへて、愛あひらしき言葉ことばかけらるゝ時ときには、
 道みちに背そむかば背そむけ世よの嗤ものわらひ笑あはにならばなれ、君きみ故捨ゆへすつる名眞なしんぞ
 惜をしからず、今日けふは思おもふ心こころもらさんか明日あすは胸むねの中うち明あけんか
 と、眞實まめなる人ひとほど戀こひは苦くるし、斯かかるおもひの幾筋いくすぢを撚より合あ
 はされし身みなるものから、糸子いとこが心こころは春はるの柳やなぎ、そむかず靡なびかず
 なよくととして、無邪氣むじやきの笑顔ゑがほいつも愛あいらしく、雪せつぎょう三さんよ菊きく※の

秋あき草くさ盛さかりなりとかきくを、此この程ほどすぐさず伴ともひては給たまはらずや
 と搔かき口くち説ときしに、何なんの違ちがひのある筈はずなく、お前まへさま御ご都合ごつがふにて何
 時つにてもお供ともすべしと、松まつ野のは答こたへぬ、秋あき雨さめはれて後のち一日いちにち今日けふ
 はと俄にはかにおもたちちて、糸いと子こ例れいの飾かざりなき粧よそほひに身み支したく度はやく終をはり
 て、松まつ野のが來くる間ままち遠とほしく雪せつ三ぎやうがもと我われより誘さそいぬ、と見
 れば玄げん關くわんに見み馴なれぬ沓くつ一そく足あしあり、客きやく來くらにやあらん折をりわろ
 かりと歩ほを返かへせしが、さりとも此この處ところまで來きしものを此このま歸かへるも
 無む益やくしと、庭にはより廻めぐりて椽ゑんに上あがれば、客きやく間まめきたる所ところに話
 し聲こゑす、徐やら次つぎの間まにかいひそまりて聞きくともなしに耳みみたつれば、
 客きやくはそも誰たれなるにや、青あ柳をといふこゑいと子よと呼こゑをりぶ聲こゑ折り々々
 に交まじりぬ、さても何なに事ごとを談だんずるにや、我われにも關くわん係けいあり氣げ

なるをと、襖ふすまに寄りて靜しづかに聞きけば、斷だんぞく續きこして聞きこゆるもの語がたりの
 意味いみ明めい亮りやうにあらねども、大方おほかたは知しれ渡わたりぬ、聞きく人ひとありと
 は知しらぬもの、詞ことばあまりは高たかからず、松野まつのに向むかひて坐ざしたるは竹
 けむらしやく、村むら子し爵やくが家か從じゆうの何なにがし、主しゆうめい命めいに依よりて糸いと子こ縁えん談だんの申
こみし込こなるべし、其その時とき雪せつ三ざう決けつ然ぜんとせし聲こわね音ねにて、折せつ角かくの御
こんもう懇望こんぼうながら糸いと子こさま御儀おんぎ他家たけへ嫁かしたまふ御身おんみならねばお心承
 るまでもなし、雪せつ三ざう斷だん然ぜんお斷ことばり申ごきていす御歸邸ごきていのうへ御前ごぜん体ていよ
 ろしく仰おほせ上あげられたしといひ放はなてば、然さる仰おほせあらんとは存ぞんぜ
 しなり、然しからば賀むこぎ君みとしては迎むかへさせ給たまはずやといふ、否いなとよ
とと、角かくに御身ごみぶん分柄ぶんがらつり合あはず、末すゑのほど覺おぼ束つかなければと言いひかゝ
うちるを打うちけて、そは御懸念ごけねんが深ふかすぎずや、釣つり合あふとつり合あぬは御お

心こゝろの上うへのことなり、一應おつういと子こさまの御心ごしんちう中うかがくた
 し、其そのお答こたへ承うけたまはらずば歸邸ききていいたし難がたし平ひらにお伺うかひありたしと押お
 返しかへせば、それ程ほどに仰おほせらるゝを包つむも甲斐かひなし、誠まことのこと申あ上げ
 ん、糸子いとこさまには最もはや定さだまる人ひとおはすなりそれ故ゆゑのお断ことはりぞ
 と莞爾にっこと笑えめば、家かじ従ゆうは少すこし身みを進すすませて、始はじめて承うけたま
 何いづかた方かたへの御縁組ごえんぐみにや苦くるしからずは仰おほせきけられたしと雪せつ三さう
 の面おもてキツと見みれば、糸子いとこも間あひの襖ふすまの際きはにぴつたりと身みを寄よせつ
 あやしのことよと耳みみそばだつれば、松野まつの例れいに似にぬ高調子たかてうしに然さら
 ば聞きかき參まゐらせん御歸邸ごきていのうへ御主君ごしゆくん、殊ことに縁みどり君くんに御傳おつたへ
 願ねがひたし、糸子いとこが契約けいやくの良人をとは、誰たれにもあらず、松野雪まつのせつぎ
 三うすなは即かち斯おのれくいふ小生

下

戀こひは 一いつ方ほうに強つよよく 一いつ方ほうに弱よはきものと聞きくは偽いつはり何いづれ方ほうすて
 られぬ花はな紅葉もみぢの色いろはなけれど松まつ野のの心こゝろ根ねあはれなり、然さりと
 て竹たけむら村むらの君きみが優やさしき姿すがた一度どは思おもひ絶たえもしたれ、淺あさからぬ御み
 志こゝろざしの忝かたじけなさよ、斯かく思おもふは我われに定てい操さうの無なければにや、脆も
 ろき情こゝろのやる方かたもなし、扨さても松まつ野のが今け日ふの詞ことば、おどろきしは我われの
 みならず竹たけむら村むらの御おし使し者やもい**か**ばかりなりけん、立たち歸かへりて斯かく
 斯かくなりしとも申まをさんに、何なには置おきて御おんさげすみ恥はづかし、睦むつま
 しかりしも道だうり理しう、主しう従じゆうとは名なのみなりしならんなど、彼かの君きみに思おも
 はれ奉たてまつらん口くち惜をしさよ、是これも誰たれ故ゆゑ雪せつ三さん故ごなり、松まつ野のが邪じや心しん
 一いつツゆゑぞ、然しかはあれども御おし使し者や歸き路ろにつき給たまひし後のち、身みを投な

げ出^だしての詞^{ことば}今^まも忘れ^{わす}難^{がた}し、御身^{おんみ}は竹村^{たけむら}を床^{ゆか}しと覺^{おぼ}すか、緑^{みどり}ど
 のとやら慕^{した}はしく思^{おも}ひ給^{たま}ふか、さらばい^{ばか}か斗^{せつぎう}り雪^{にく}三憎^{おぼ}しと覺^{おぼ}す
 なるべし、さりながら往^{いつぞや}日の御^{おんことば}詞^{いつは}は偽^{いつは}りなりしか、汝^{そち}さへ
 に見^{みすて}捨^{すて}ずば我^わが生^{しやうがい}涯^{かい}の幸^{かうふく}福^{ふく}ぞと、忝^{かたじ}けなき仰^{おほうけたま}せ承^まはりてよ
 りいとゞ狂^{くる}ふ心^{こころ}止^{とめ}がたく、口^{くち}にするは今日^{けふはじ}始^{はじ}めてなれど、盡^つくし
 たる心^{こころ}はおのづから御覽^{ごらん}じしるべし、姿^{すがた}むくつけく器^{きりやう}量^{やう}世^よにお
 とりしとて厭^{いと}とはせ給^{たま}はゞ、我^われも男^{をとこ}のはしなり、聞^きかれ參^{まゐ}らせ
 ずとて只^{ただ}やはある、他人^{よそ}の眺^{なが}めの妬^{ねた}ましきよりはと、花^{はな}に吹^ふく嵐^{あらし}
 のおそろしき心^{こころ}ろも我^われ知^しらず起^{おこ}らん^{にや}、許^{ゆる}るさせたまへとて
 戀^{こひ}なればこそ忠^{ちうぎ}義^ぎに鍛^{きた}へし、六尺^{しやく}の大^{おほ}男^{おとこ}が身^みをふるはせて打^う
 泣^{ちな}き、姿^{すがた}おもへば扱^{さて}も罪^{つみ}ふかし、六歳^{ろくさい}のむかし、我^われ兩^{りやう}

親おに後おくれしいらい來らい、延のびし背せ丈たけは誰たれの庇か護げかは、幼え稚うちの折をりこの心ろ

ならつひに、謹つみもしなく馴なれなまつはりて、鉄てつ石せきの心こうろごかせしは、

構かへまて松まつ野の咎とがならわず我わが心ころこのいたらねばなり、今いま我われ松まつ野のを

捨すてたけむら竹たけ村むらの君きまれた誰たれにまれ、寄よる邊べをそこ所と定さだめなば哀あは

れせつぎや雪せつぎ三みは身みも狂きやううべし、我わ幸わ福かうふくをもと求もむとて可あたらちうぎの身み

世よの嗤ものわらひ笑ひになさせることかは、さりとて是これにも随がひがた

きなを、何なとして何なにとせば松まつ野のが心ころまよまの迷まひもさ覺さめ、竹たけ村むらの君きへ

我わが潔けつぱくく白はくくもあかか顯あかかされん、何いづれ方はにまれ憎にくき人ひと一人ひとりあらば、斯かく

まむで胸むねはなやままじを、果はかなの身みやとうち仰あふくげば空そらに澄すむ月つき影かげ

きよし、肘ひぢを寄よせたる丸まる窓まどのなもとに何なんの呷さくやぞ風かぜに鳴なる荻をぎの

友ともずり、我わが蔭かげごとか哀あはれはづかし、見み渡わたす花はなぞの園のはよるの錦にしきを

つき
 月にほこりて、轉ぶ白玉の露うるはしく、おもへば誰れも消ゆる
 よ
 世なるを、我が身一ツなき物にせば、何方に何の障りか有るべき、
 わ
 我れ憂き世の厭はしきは今はじめたることならず、捨てんは兼ね
 ねが
 よりの願ひなり、歎くべきことならずと嫣然と笑みて靜かに取
 だ
 出す料紙硯、墨すり流して筆先あらためつ、書き流がす文
 た
 誰れくが手に落ちて明日は記念と見ん名残の名筆

青空文庫情報

底本：「武蔵野 第二編」今古堂

1892（明治25）年4月17日

初出：「武蔵野 第二編」今古堂

1892（明治25）年4月17日

※表題は底本では、「たま※」#「いろもへん十攀」、U+897B
「《だすき》」となっています。

※変体仮名は、通常の仮名で入力しました。

※「いと子」と「糸子」の混在は、底本通りです。

入力：万波通彦

校正・・Juki

2019年2月22日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<https://www.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

たま※ [#「ころもへん+攀」、U+897B]
一葉女史

2020年 7月13日 初版

奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>